

#### 4 C型慢性肝炎に合併した多血性胆管細胞癌の 1 切除例

渡辺 孝治・水野 研一・馬場 靖幸  
石川 達・林 俊彦・吉田 俊明  
上村 朝輝・坪野 俊広\*・武田 敬子\*\*  
淡路 正則\*\*・石原 法子\*\*\*  
石塚 基成\*\*\*\*

済生会新潟第二病院消化器科  
同 外科\*  
同 放射線科\*\*  
同 病理\*\*\*  
白根健生病院消化器科\*\*\*\*

胆管細胞癌の vascularity は多血性から乏血性  
のものまで様々であるが、今回我々はC型慢性肝  
炎に合併した極めて多血性の胆管細胞癌の1例  
を経験したので報告する。

症例は61歳、男性。近医のスクリーニング検  
査で肝腫瘍を指摘され白根健生病院受診。C型慢  
性肝炎に合併した非典型的肝細胞癌の診断で平  
成15年4月21日当科紹介入院となった。血液検  
査ではHCV抗体陽性、AFP 3.3ng/ml、PIVKA-II  
20AU/ml、CEA 1.3ng/ml、CA19-9 19U/ml ICG  
(R15) 16.3、(K) 0.117。US、CT、MRIではS5-  
6径3.5cmの血流豊富な腫瘍であったが血管腫で  
はなかった。また胆管の閉塞像も認めなかった。  
血管造影でも実質相で極めて強く濃染し、CTAP  
では門脈血流は認めなかった。またSMANCSを  
注入したがLipiodolの沈着はなかった。各種画像  
診断では確定診断に到らなかったためUS下生検  
を施行。組織で腫瘍部は細胞異型および免疫染色  
より胆管細胞癌を疑った。非腫瘍部は慢性肝炎  
(A1/F1-2)であった。5月22日肝部分切除術を  
施行。切除標本で腫瘍は白色で、組織は高分化腺  
癌で一部低分化の部分も認め胆管細胞癌と診断  
した。術後経過良好で6月10日退院となった。

#### 5 著名な壊死傾向を呈した肝細胞癌の1例

青木 信将・船田 理子・玄田 拓哉  
見田 有作・須田 剛士・渡辺 雅史  
大越 章吾・市田 隆文・野本 実  
青柳 豊・白井 良夫\*・横山 直行\*  
石川 卓\*・金子 耕司\*

新潟大学医学総合病院消化器  
内科学分野  
同 消化器・一般外科学分野\*

症例は52歳、男性。飲酒歴は3合/日を30年。  
検診でアルコール性肝障害を指摘。2002年6月  
肝S6に径6cmの腫瘍を指摘。精査目的に9月当  
科入院。CTで最大径7cmの腫瘍を認め、dynam-  
ic CTでは辺縁は徐々に造影、一部早期濃染像が  
散在性にみられた。中心部は造影されなかった。  
MRIではT1WIで辺縁部低信号、中央部やや高信  
号、T2WIでは不均一な高信号を呈した。肝シン  
チグラフィでは静注120分後に腫瘍辺縁に集  
積し、長期の血流鬱滞を認め肝血管腫が疑われ  
た。2003年9月AFPは異常高値を示し、10月に  
腹部血管造影を行った。S6の腫瘍は若干の増大  
を認め、S2に典型的な多血性の肝細胞癌を指摘  
された。血管造影後、AFPは無治療で164,224  
ng/dlから6,062ng/dlへと減少した。その後、肝  
右葉切除+S2部分切除を行った。病理所見では  
腫瘍部は出血性壊死で、ごく一部に肝細胞癌組織  
が残存していた。腫瘍は厚い線維性被膜で被われ  
ており幼若な腫瘍血管を伴っていた。

#### 6 CO<sub>2</sub>-DSAによりリザーバー留置し、化学療 法が奏効したヨード過敏の門脈腫瘍塞栓肝 細胞癌の1例

石川 達・渡辺 孝治・馬場 靖幸  
太田 宏信・吉田 俊明・上村 朝輝

済生会新潟第二病院消化器科

症例は77歳、男性。2000年7月肝機能異常を  
指摘され、当院受診。腹部造影CT検査ほか精査  
にてC型慢性肝炎に合併した肝細胞癌の診断で  
入院。この際はヨードアレルギーなどなく、腹部  
血管造影施行し、SMANCS動注し、奏効してい  
た。2002年、腎結石が疑われ、5月15日、腹部造